

INTERVIEW

医療法人社団和楽仁 芳珠記念病院 理事長
仲井培雄先生



2025年, 2040年の 社会を見据えて医療を考える

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

へき地医療を経験後、病院の経営者に

山田隆司(聞き手) 今日は石川県の芳珠記念病院に仲井培雄先生をお訪ねしました。

まずは先生の経歴を紹介していただけますか。

仲井培雄 私は石川県立小松高校を卒業して自治医科大学に入学し、卒業後初期研修は石川県立中央病院で、2年間全科ローテーションを行いました。

山田 先生は自治医大の何期生ですか？

仲井 8期生です。

当時、自治医大の先輩方からは臓器別専門医としっかりコネを作って、「へき地や離島診療所に行くときにはいつでも電話をして聞けるようにしておきなさい」ということを言われました。「患者にとって緊急を要する厳しい状態という

のはどんな状態かを直感的に分かるように覚えておきなさい」ということも教えていただきました。

初期研修終了後は輪島病院に半年間行き、1985年10月から石川県最北端舳倉島診療所に半年間行きました。看護師もいない、医者一人だけの離島診療所です。次に行ったのが県最南端の白峰村診療所です。

それから金沢大学附属病院の第2外科に入局しました。自分の父が私の在学中に開設した芳珠記念病院で外科医を確保できず第2外科から医師を派遣してもらっていたからです。ところが石川県の自治医大卒業生は石川県立中央病院で初期研修を行っていて、石川県立中央病院は

第1外科関連の病院だったため、県から第1外科の所属でなければ駄目だと言われました。へき地へは行きたかったのですが、将来自分の父の病院で働くために、私はこの時に奨学金を返納して義務を離脱することになりました。そういうことになって、一時期は同窓会などにも出られなくなり、とても辛かったですが、今は理解を得られてとても感謝しています。

金沢大学第2外科で外科専門医を取得して学位も取ったあとに、父の病院である芳珠記念病院の外科部長に就任しました。その後父の勧めで、オーストラリアのRoyal Brisbane Hospitalへ1年間行き、Visiting Medical Officerとして腹部の鏡視下外科手術と海外の医療制度と文化を学びました。

帰国後、2004年に病院の理事長に就任し、2012年には社会福祉法人の理事長にも就任しました。そして改めて地域医療と介護の重要性を認識するようになりました。その後2014年5月に、地域包括ケア病棟協会の初代会長に就任しました。

山田 自治医大卒業生にとって、県によっては地元の大学の医局制度との関係がいろいろあって、特に1桁世代では苦勞したという話はよく聞きます。先生は中でも非常に厳しい環境にあって、大変だったのですね。

一方で外科医として研鑽を積み重ねていく中で、お父さんの病院を手伝おうと最初にここに着任されたときはどういう感じだったのですか。

仲井 職員からは医者としてよりも経営者として求められました。それがちょっとショックでしたね。

山田 やはり若いころは臨床医として自分の技能を磨くことに関心が高いと思いますが、先生もここにきて、まずは外科医として一人前になることが目標だったわけですね。

仲井 はい、39歳でまだ若かったのです。

山田 ところが自分が経営者として関与せざるを得



聞き手：地域医療研究所長・「月刊地域医学」編集長 山田隆司

ない状況だったのですね。

仲井 父親からは、病院はうまくいっているという話を聞いていたのですが、そうではなかったのです。まず着任した時に「医薬分業」することが決められていたのに全く形ができていなかったもので、これから手をつけようと思いました。ネット等で調べて、医薬分業に詳しい先生にいろいろ教えてもらって、うまく分業を進めることができました。

山田 なるほど、否応なしに経営に関わっていった訳ですね。次に取り組みされたのはどんなことですか。

仲井 実は医薬分業と同時に病院の増改築が進められていたのです。建物の建設は進んでいましたが、医療機器は更新されていなかった。そこで建物を建てた直後にまた融資を受けて、医療機器を大量に購入しました。大変な目にありましたが、そうしないと職員は残らなかったと思います。

山田 先生は外科医として技術を磨きたいという気持ちがある中で、病院を運営していかなければならないということとのギャップはなかったのですか。

仲井 もちろんありました。自分は外科医ですから